

## 虹色の軌跡

後藤 里奈

受賞のことば

この度の受賞、たいへん嬉しく思います。つい最近まで競馬とはまったく縁のない私でしたが、息子が熱中し始めたことをきっかけに、私も競馬や馬の魅力徐徐に感じていきます。今回偶然にもこのエッセイの募集を知り、競馬が私たちに親子にもたらしてくれた希望について綴ることができました。息子は今もジョッキーマスターを目指して頑張っています。もう少し成長したら、このエッセイを読んでもらいたいと思っています。

## プロフィール

1988年岩手県生まれ。現在は都内の高校で英語教師として勤めている。息子の影響で競馬に興味を持ち始め、最近では休日息子と一緒に乗馬体験に行くことを楽しみとしている。

「もう学校には行かない」

小学校に上がってまだ間もない頃、息子が突然そう宣言した。つい最近まで、買ってもらったランドセルを何度も取り出し、あれほど期待に胸を膨らませていたのに…。入学後も楽しそうに学校に通っているように見えた。学校に行きたくない理由をいくら聞いても息子は答えてくれなかった。一時的なものかもしれないと思い、しばらくは仕方なく学校を休ませ様子を見たが、一週間経ち、一ヶ月経っても一向に学校へ行こうとしない。そのうち、学校のことを話題に出すだけで嫌がるようになってしまった。発達障害を持つ息子は、もともと人とコミュニケーションをとるのが難しい。自分の思い通りにいかないことや気に入らないことがあると、すぐに癇癪を起し、所かまわず暴れまわる。学校にうまく馴染めるか不安があったが、こんなに早くつまづいてしまうとは…。部屋に閉じこもる息子の姿を見ると、私まで鬱々とした気分になり、どうすればよいか分からず困り果てた。シングルマザーである私はこのまま仕事を休み続けるわけ

にもいかず、途方に暮れていた時、私の父が「たまにはどこかへ連れて行ってやろう」と言って二人で外出していった。ご時世的にも外出は控えていたため、息子にとっては久々の遠出である。

その日、珍しく上機嫌で帰宅した息子。どこに行ってきたのかは「男同士の秘密」であるらしい。こういう時、母親としては多少ヤキモチを焼いてしまうが、父親のいない寂しさを普段は我慢しているのかもしれない。なんだか嬉しそうな息子の顔を見られただけで私は満足だった。それから、息子と父は頻繁に週末出かけるようになった。その度息子は徐々に明るさを取り戻していった。いったいどんな楽しい場所へ連れて行ってもらっているのか、気になって仕方なかったが、「男同士の秘密」と言われたからにはそれ以上聞き出すわけにもいかず、静かに見守ることにした。

しかし、その秘密はすぐにあっけなく明かされてしまった。ある日、まだ字が読めないはずの息子が熱心に新聞を読みながら、聴き慣れぬキャラクターの名前のよう

なものをぶつぶつ呟いていた。「何を読んでいるの？」

と尋ねると、「予想してるんだよ」と息子。私は目と耳を疑った。息子が読んでいたのはなんと競馬新聞だった。毎週末、男同士喜々として出掛けていた先は、競馬場だったのだ。そして、私が苦勞して教え込もうとしてもまったく興味を示さなかった文字を、息子は競走馬の名前を覚えたい一心で読めるようになっていたのだ。ここ最近の息子の変化は親として喜ばしいことだが、子供が学校にも行かず競馬通いをしているのは、やはり見過ごせない。こんなに幼いうちからギャンブルを覚えてしまったらどうしてくれるのか…。慌てて父に問い質してみても、「競馬はただのギャンブルとは違うんだ。そう目くじらを立てるな」と、取り付く島もない。だが、息子が祖父と過ごす貴重な時間、二人の楽しみを奪ってしまうのも気が引け、ある時、私は息子達と競馬に同行してみることにした。道中、父と息子は早くも「今日の予想」の話で盛り上がり、すでに興奮気味だ。そして初めての競馬場。中へ入ると、意外にも家族連れや女性の姿が目

立ち、開放的な雰囲気イメージが少し変わった。父は早速馬券を購入すると、得意げな様子で息子に解説し始めた。そんな父の表情を見るのも初めてだった。「余計な知識は教えないで」と言いたいところだが、息子は競馬のおかげで字も読めるようになったのだ。文句は言えない。そしていよいよレース開始。ファンファーレが鳴りゲートが開いた瞬間、自然と私の胸も高鳴った。一斉に馬が走り出し、風を切って颯爽と駆け抜けていく様子は、見ていて気持ちがいいものだ。隣では息子が固唾をのんでレースを見守っている。「息子が応援している馬はどれだろう」と思っていると、彼は最後尾にいるらしい馬の名前を大声で呼び始めた。誰にも期待されず、周りに置いていかれそうな馬の姿を自分自身と重ねているのだろうか。「ガンバレ!!」と夢中で叫び続ける息子の姿に目頭が熱くなった。人の感情を読みとるのが苦手な息子が、最後尾を走る馬に思いを寄せ、一生懸命応援している。いつの間にかこんなに成長したのだろうか——。

きつとこれも競馬のおかげなのだ。父が「競馬はただのギャンブルとは違う」と言った意味が分かったような気がした。

ついにすべての馬がゴールした。息子が応援していた馬は結局最下位だったが、最後まで諦めずに全力を尽くした馬を讃え、満足気な表情で拍手を送っていた。こうして一回一回のレースから、息子は多くのことを学んでいたのだろうか。それは、学校では得られない貴重な経験なのかもしれない。

レースを終えたばかりの競馬場に虹色の軌跡が見え、

空中都市にいるような錯覚をおぼえた。私自身、こんなワクワク感を味わったのは久々で、なんだか晴れ晴れとした気分になった。

思えば、私は息子と外出する際、彼が突然大声を出したり走り出したりはしないかと、いつもハラハラしていた。周囲の視線も気になり、迷惑がられているのではないかと不安から、なんとなく肩身の狭い思いをしていた。そしてそんな私の気持ちは、息子にも伝わっていたのだろうか。しかし、競馬場では不思議とそんなことは気にならず、新たな発見と感動がたくさんあった。競馬場は彼にとって、ありのままの自分を受け容れ、認めてくれる場所でもあったのだ。私は息子の特性を理解しているつもりで、実のところはまったく息子の気持ちは尊重していなかったのだと気づいた。この日を境に、私は時々「男同士の外出」にお供させてもらうようになり、私自身も競馬の魅力にハマりつつある。中にはポニーの乗馬体験や、サラブレッドとの記念撮影会などのイベントが行われる所もあり、子供も楽しめるレジャー施設であることが分かった。

奇しくも、息子の名前は「春馬」。数年前に亡くなった私の夫が、「天空に元氣よく駆け上がっていくように」との願いを込めて付けた名前だ。夫は大学時代から馬術部に所属し、休日乗馬をしに出掛けるほどの馬好きだった。同じように馬に魅せられた我が子の姿を、天国から喜んで見ていることだろう。

あれから一年、息子は小学二年生になった。最近では

少しずつ登校できる日が増え、友達もできたようだ。もちろん毎週の競馬通いは欠かさず、今ではすっかり「競馬オタク」だ。ミルコ・デムーロという騎手に憧れているようで、苦手な食べ物も「デムーロみたいになれないよ」と言うと同張って食べてくれる。以前のように敵しく叱っていた頃とはお互い大違いだ。競馬は私に、子育てで大切なことも教えてくれた。

「名馬に癖あり」と言うように、足の速い馬は気性が荒く扱いにくい。だが、だからと言って無理矢理コントロールしようとしても逆効果なのだ。この子にはこの子のペースがあり、一気に走り抜きたい時もあれば、立ち止まったり、コースから外れて寄り道したくなったりすることも。転んで倒れたら、また起き上がって走り出せばいい。子供の個性を生かし、やる気を出させるのは乗り手次第なのだ。どんな形であろうと、どれほど時間がかかろうと、ゴールに辿り着ければそれでいいのだと、今は思える。

先日、息子の授業参観があり、クラスの子供達が一人ずつ「自分の将来の夢」について発表していた。すると、人前で発言するのが苦手な息子が、「僕の夢はミルコ・デムーロのようなジョッキーになることです」と、高らかに宣言した。一年前とは見違えるほど堂々とした姿に、勇気を貰えた。

息子はこれからも、ジョッキーになるという夢に向かってまっしぐらに駆け上がっていつてくれることだろう。あの日競馬場で見た虹色の軌跡を残して——。